

改訂第七版

多磨全生園とハンセン病を知る

ブックリストと資料



東村山市「いのちの教育」推進プラン関連事業

東村山市立図書館

は じ め に

図書館では、東村山市「いのちの教育」推進プラン関連事業として、いのちの大切さを伝える本を集めたブックリストを発行しています。

子ども向けには『いのちのたいせつさを考える本』（平成14・15年度）、『いのちの大切さを考える絵本（幼児～小学生向け）』（平成17年度～）、『ブックリスト 本で知ろう！ハンセン病<小中学生～>』（平成28年度～）などを発行しています。

大人の方向けには、平成16年度に作成した『全生園とハンセン病を知る』を改訂第六版より『多磨全生園とハンセン病を知る』に改題し、必要に応じて内容を改訂しています。

東村山市青葉町には、ハンセン病療養者のための施設「国立療養所多磨全生園」と「国立ハンセン病資料館」があります。図書館では、多磨全生園に関する資料については、地域の情報として開館当初から収集・保管してきました。関連する新聞記事やパンフレット等もあわせて収集するとともに、中央図書館と多磨全生園に近い秋津図書館には「ハンセン病を知る本」のコーナーを設置しています。また、秋津文化センター入口には、『いのちの初夜』の著者北條民雄の文学碑があります。

今後も、多磨全生園やハンセン病について知ることを通して、「いのちの大切さ」を深く考えるきっかけにいただけるように、資料を集め、広く市民の方に提供していきたいと考えています。このブックリストでご紹介した本は多磨全生園・ハンセン病関連図書のごく一部です。「ハンセン病を知る本」コーナーの本も、あわせてご利用ください。

ブックリスト作成にあたっては、国立療養所多磨全生園入所者自治会ならびに国立ハンセン病資料館の方々に、多大なるご理解とご協力をいただきました。心よりお礼を申し上げます。

目 次

はじめに

ブックリスト

凡例	3
ハンセン病を知る	4
多磨全生園の歴史	6
多磨全生園に生きた人々	7
ハンセン病と文学	8
国立ハンセン病資料館企画展図録	9
国立ハンセン病資料館利用案内・交通案内	11

資 料

ハンセン病の知識	13
多磨全生園について	14
ハンセン病・多磨全生園関係略年表	19
いのちとこころの人権の森宣言	21

ブックリスト

凡 例

- このブックリストは大人の方に向けて編集しました。
小中学生向けには、『ブックリスト本で知ろう!ハンセン病<小中学生〜>』を発行しています。あわせてご利用ください。
- 読みたい本が見つからない場合は、図書館の職員にお尋ねください。リクエストで取り寄せることもできます。
- 紹介した本には、書名・著者名・出版社名・出版年・請求記号が書いてあります。
(例)

『火花 北条民雄の生涯』 高山文彦/著 飛鳥新社 1999年 (910.268 ホ)

著者名

出版社名

請求記号

(本に貼ってあるラベルの記号)

- 請求記号
図書館の本は、背表紙に貼ってある請求記号ラベルの順にならんでおり、請求記号ラベルにある数字が本の内容を表わしています。
請求記号に「B」がつくものは文庫です。
- 自費出版、品切れ絶版等の理由で現在入手できない本も含まれていますので、図書館の資料をご利用ください。

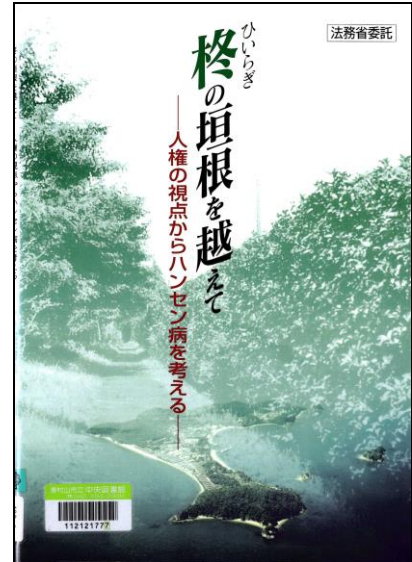
ハンセン病を知る

『柁の垣根を越えて 人権の視点からハンセン病を考える』
人権教育啓発推進センター 2006年 改訂(498.6 七)

『楽々理解ハンセン病 人生被害—人間回復への歩み』
ハンセン病国賠訴訟を支援する会・熊本/編
武村 淳/編 花伝社 2005年 新版 (498.6 う)

『知っていますか？ ハンセン病と人権 一問一答』
神 美知宏/ほか著 解放出版社
2005年 第3版(498.6 シ)

「ハンセン病とはどんな病気ですか？」など問答形式で読みやすくまとめられ、日本のハンセン病政策や患者の人権回復運動の歴史などがわかります。3冊とも初版以降、社会情勢の変化に対応し加筆・修正されています。



『正しく学ぼう!! ハンセン病Q&A』
多磨全生園入所者自治会/編集 多磨全生園入所者自治会 2020年(498.6 タ)

前半は、Q&A形式で病気の原因や治療法、隔離政策など、ハンセン病についての基本的な知識を得ることができます。後半には、ハンセン病関連の法律や年表、多磨全生園についても収録されています。

『ハンセン病をどう教えるか』
『ハンセン病をどう教えるか』編集委員会/編 解放出版社 2003年(498.6 ハ)

この本は授業教材として書かれたものです。ハンセン病に関する歴史を学ぶことで、近代以降の国の隔離政策が人々の差別や偏見を助長していたことがわかります。

『開かれた扉 ハンセン病裁判を闘った人たち』

ハンセン病違憲国賠訴訟弁護団/著 講談社 2003年(498.6ハ)

2001年(平成13年)ハンセン病違憲国家賠償訴訟で原告側が勝訴し、国の控訴断念により、国が90年以上にわたる療養所の隔離政策の誤りを認めた画期的な判決が確定しました。裁判をめぐり、一部の国民からの非難や患者のとまどいなどを経て、多くの原告の勇気ある証言が国の重い扉を開きました。

『差別とハンセン病 「柵の垣根」は今も』

畑谷史代/著 平凡社(平凡社新書) 2006年(498.6ハ)

多磨全生園長野県人会の会長への取材から、信濃毎日新聞に長期連載された記事がもとになった本です。「ハンセン病問題に関する検証会議(*1)」副座長へのインタビューと最終報告書の解説が資料編としてついています。

(*1) 2001年(平成13年)の熊本地裁判決を受けて、国がハンセン病問題の歴史的検証と再発防止のために設置した第三者機関。2005年(平成17年)3月に最終報告書を公表。

『ここに人間あり 写真で見るハンセン病の39年』

大谷英之/著 毎日新聞社 2007年(498.6オ)

表紙に使われている、点字図書を「舌読」する入所者の姿が印象的です。

1967年(昭和42年)からの入所者との交流を通じて撮影された写真は、多くの文章よりも雄弁に様々なことを私たちに問いかけます。

－ ほかにもこんな本があります －

『ハンセン病家族たちの物語』 黒坂愛衣/著 世織書房 2015年(498.6ク)

『ハンセン病家族の絆 隔離の壁に引き裂かれても』 福西征子/著 昭和堂 2018年(916フ)

『ハンセン病重監房の記録』 宮坂道夫/著 集英社(集英社新書) 2006年(498.6ミ)

多磨全生園の歴史

『俱会一处 患者が綴る全生園の七十年』

多磨全生園患者自治会/編 一光社 1979年(498.6㌦)

この本は、差別と偏見を受けた入所者の日々の克明な記録です。戦後も続いた差別との闘いや、地域の人々との交流を通して、入所者の思いが伝わってきます。「俱会一处」とは、「この世で同じ運命をともに生きたが、また浄土でも会いましょう」という意味の『阿弥陀経』に出てくる言葉で、園内納骨堂の正面パネルに刻まれています。



『全生園の森 人と光と風と 創立90周年記念写真集』

多磨全生園創立90周年記念事業実行委員会 現代書館 1999年(498.6㌦)

患者による石道作りや山のように積まれた包帯巻きの作業、寺子屋授業や農産物の収穫の様子など、入所者の生活が写真で記録され、大正時代から現在までの園内の空気が伝わってきます。

『全生園の100年と東村山 特別展図録』 東村山ふるさと歴史館 2009年(498.6㌦)

1909年(明治42年)、当地での全生病院開院に際しては、激しい反対運動や差別もありましたが、全生座歌舞伎や農産物品評会などを通して地域との交流が始まりました。戦後は公民館活動や人権の森構想など、さらにつながりが広がっています。多磨全生園と東村山の100年にわたる交流を記録したふるさと歴史館特別展図録です。

— ほかにもこんな本があります —

『想いでできた土地 ハンセン病療養所多磨全生園の記憶・くらし・望みをめぐる』

国立ハンセン病資料館/編集 国立ハンセン病資料館 2021年(498.6㌦)

『いのちの森に暮らす ハンセン病療養所 多磨全生園のいま』

三島悟/編集 宇井真紀子・広瀬敦司/写真

東村山市・多磨全生園入所者自治会 2015年(498.6㌦)

『多磨全生園と学校 ハンセン病と子どもたち』

東村山ふるさと歴史館/編集 東村山ふるさと歴史館 2022年(498.6㌦)

『多磨全生園・〈ふるさと〉の森 ハンセン病療養所に生きる』

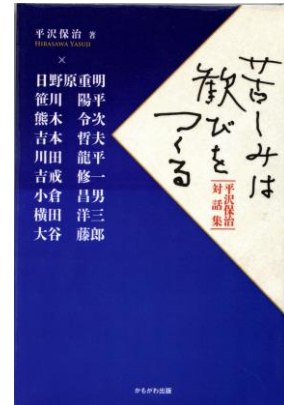
柴田隆行/著 社会評論社 2008年(498.6㌦)

多磨全生園に生きた人々

『苦しみは喜びをつくる 平沢保治対話集』

平沢保治/著 かもがわ出版 2013年(498.6 ㌧)

14歳で多磨全生園に入所し、戦後はハンセン病回復者や患者への差別解消運動に力を尽くした平沢さんと、元東村山市長熊木令次さんら9人との対話集です。かつて強いられた困難な状況や人権の森のこと、保育園の子どもたちとの交流のことなどを語り合います。



『生きるって、楽しくって ハンセン病を生きた山内定・きみ江夫妻の愛情物語』

片野田斉/撮影・文 クラッセ 2012年(289.1 ヲ)

ハンセン病の語り部になると決心した山内きみ江さんのありのままの日常や孫の誕生、夫の死などを描いた写真集です。著者は東村山市出身のカメラマンです。

『証言・日本人の過ち ハンセン病を生きて一森元美代治・美恵子は語る』

藤田真一/編著 人間と歴史社 1996年(498.6 ㌧)

厳しい差別を受けたハンセン病患者は、家族のためにも実名を名乗りませんでした。らい予防法廃止後、実名を公表した森元夫妻の証言は貴重です。

— ほかにこんな資料があります —

『ハンセン病患者の生活史 隔離経験を生きるということ』

坂田勝彦/著 青弓社 2012年(498.6 ヲ)

『ハンセン病図書館 歴史遺産を後世に』 山下道輔/著 社会評論社 2011年(016.5 ヲ)

『患者教師・子どもたち・絶滅隔離(ハンセン病療養所) 全生分教室自治と子ども手当て』

樋渡直哉/著 地歴社 2013年(498.6 ㌧)

DVD「平沢保治さん講演 小学生中学年編」

DVD「平沢保治さん講演 小学生高学年編」

DVD「平沢保治さん講演 中学生編」

DVD「ひいらぎとくぬぎ 多磨全生園 人権の森」

国立ハンセン病資料館/企画・製作

2010年(DV498.6 ㌧)

東村山市・多磨全生園入所者自治会 2014年(DV498.6 ㌧)

DVD「語り部講演会 多磨全生園「人権の森」を考える」

平沢保治/語り部 東村山市 2017年(DV498.6 ㌧)

DVD「未来への虹 ぼくのおじさんはハンセン病」

人権教育啓発推進センター 1995年(DV498.6 ミ)

ハンセン病と文学

『いのちの初夜』 北條民雄/著

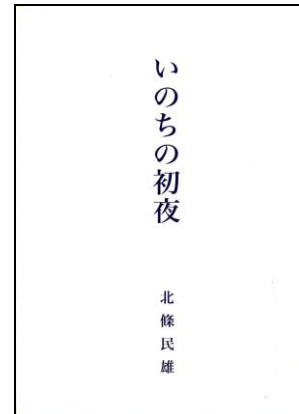
改版 KADOKAWA(角川文庫) 2020年(B913.6ホ)

高松宮記念ハンセン病資料館 2002年(913.6ホ)

勉誠出版 2010年(913.6ホ)

(『定本北條民雄全集 上』) 東京創元社 1980年(918.68ホ)

東京創元社(創元ライブラリ) 1996年(B918.68ホ)



北條民雄は、1934年(昭和9年)に多磨全生園に入所し、その3年後に23歳で亡くなりました。短い生涯の中で小説を書き上げ、それが作家川端康成の目にとまり、雑誌『文学界』に掲載されました。この作品は、恐怖や不安をかかえて入院してきた主人公の最初の1日が描かれています。

『あん』

ドリアン助川/著 ポプラ社 2013年(913.6ド)

ポプラ社(ポプラ文庫) 2015年(B913.6ド)

千太郎が一人で切り盛りするどら焼き屋に、指の曲がったお婆さんが雇ってほしいとやって来ました。吉井徳江76歳と名乗るその人が作る“あん”は絶品でした。おしゃべりな徳江でしたが、なぜか自分のことになると言葉を濁すのでした。

『ハンセン病文学全集』(全10巻) 皓星社 2002年~2010年(918.6ハ)

ハンセン病療養所入所者の作品を網羅的に集めた初の全集です。小説・随筆・詩歌など幅広い作品が収録されています。

— ほかにもこんな本があります —

『砂の器 上・下』 松本清張/著 改版 新潮社(新潮文庫) 2006年(B913.6マ)

(『松本清張全集 5』) 文藝春秋 1971年(913.6マ)

『塔和子全詩集』(全3巻) 塔和子/著 編集工房ノア 2004年~2006年(911.56ト)

『火花 北条民雄の生涯』 高山文彦/著 飛鳥新社 1999年(910.268ホ)

角川書店(角川文庫) 2003年(B910.268ホ)

『挑発ある文学史 誤読され続ける部落／ハンセン病文芸』

秦重雄/著 かもがわ出版 2011年(910.26ハ)

国立ハンセン病資料館企画展図録

国立ハンセン病資料館では、常設展の他に毎年企画展を開催しています。企画展ごとに作成している図録は、解説の他展示品の写真なども豊富に収録され、ハンセン病についての理解を深めることができます。

年 度	図録タイトル	請求記号	所蔵館
2007 年度	趙昌源絵画展－小鹿島の光と影	723.2 ㊦	中央・秋津
	こころのつくろい－隔離の中での創作活動	708.7 コ	中央・秋津・廻田
2008 年度	ハンセン病療養所の現在	498.6 ハ	全館
	ちぎられた心を抱いて－隔離の中で生きた子どもたち	498.6 ㊦	全館
	多磨全生園陶芸室のあゆみ	751 ㊦	中央・秋津・廻田
	北高作陶展－仲間に支えられて	751 キ	中央・富士見・秋津・廻田
2009 年度	隔離の百年－公立癩療養所の誕生	498.6 カ	全館
	桃生小富士展	723.1 モ	中央・秋津・廻田
2010 年度	着物にみる療養所の暮らし	498.6 キ	中央・萩山・秋津・廻田
	「全生病院」を歩く－写された20世紀前半の療養所	498.6 ゼ	全館
	高山勝介作陶展	751.1 ㊦	中央・秋津
2011 年度	かすかな光をもとめて－療養所の中の盲人たち	498.6 カ	中央・秋津
	たたかいつづけたから、今がある －全療協60年のあゆみ 1951年～2011年	498.6 タ	中央・秋津
2012 年度	青年たちの「社会復帰」－1950－1970	498.6 セ	中央・秋津
	癩院記録－北條民雄が書いた絶対隔離下の療養所	498.6 ウ	全館
2013 年度	一遍聖絵・極楽寺絵図にみるハンセン病患者 －中世前期の患者への眼差しと処遇	498.6 イ	中央・秋津
	想いでできた土地 －多磨全生園の記憶・暮らし・望みをめぐる	498.6 オ	全館
2014 年度	林志明作品展－中国ハンセン病回復者の書画活動	722.2 リ	中央・秋津
	不自由者棟の暮らし－ハンセン病療養所の現在	498.6 ㊦	中央・秋津
	この人たちに光を －写真家趙根在が伝えた入所者の姿	498.6 コ	中央・秋津
2015 年度	私立ハンセン病療養所待労院の歩み －創立から閉院までの115年	498.6 シ	中央・秋津

年 度	図録タイトル	請求記号	所蔵館
2016 年度	「らい予防法」をふりかえる	498.6 う	中央・秋津
	生きるための熱 ースポーツにかける入所者たち	498.6 い	中央・秋津
2017 年度	ハンセン病博物館へ ようこそ	498.6 ハ	中央
	隔離のなかの食ー生きるために悦びのために	498.6 カ	中央・秋津
2018 年度	この場所を照らすメロディ ーハンセン病療養所の音楽活動	498.6 コ	中央・秋津
2019 年度	キャンパスに集う ー菊池恵楓園・金陽会絵画展	723.1 キ	中央・秋津
	望郷の丘 ー盲人会が遺した多磨全生園の歴史	498.6 ホ	中央・秋津
2020 年度	13(サーティーン) ーハンセン病療養所の現在を撮る 石井正則写真展	748 イ	中央・富士見
2021 年度	生活のデザイン ーハンセン病療養所における 自助具、義肢、補装具とその使い手たち	498.6 セ	中央・秋津



東村山市公式キャラクター「ひがっしー」

国立ハンセン病資料館利用案内・交通案内



交通案内

■バス

- 西武池袋線 清瀬駅南口から
西武バス 久米川駅北口行きで約10分（「ハンセン病資料館」で下車）
- 西武新宿線 久米川駅北口から
西武バス 清瀬駅南口行きで約20分（「ハンセン病資料館」で下車）
- JR武蔵野線 新秋津駅から
西武バス 久米川駅北口行きで約10分（「全生園前」下車、徒歩10分）
または徒歩約20分（JR武蔵野線新秋津駅・西武池袋線秋津駅から当館までの道順を地図と写真で紹介）

■自動車

- 新青梅街道「北原」交差点より約7km（約21分）
- 新青梅街道「栄町1丁目」交差点より約4km（約13分）
- 関越自動車道 所沢ICから約9km（約30分）

駐車場の台数が限られていますので、なるべく公共交通機関をご利用ください。

住 所 〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13

電 話 042-396-2909

開館時間 午前9:30～午後4:30（入館は午後4:00まで）

入 館 料 無料

休 館 日 月曜日及び「国民の祝日」の翌日 ただし、月曜が祝日の場合は開館、年末年始、館内整理日

資 料

- ＊ ハンセン病と多磨全生園に関する資料は、多磨全生園入所者自治会および
国立ハンセン病資料館のご協力を得て編集しました。

「ハンセン病の知識」

『小学生のためのハンセン病の知識』（ハンセン病資料館）
『中学・高校生のためのハンセン病の知識』（ハンセン病資料館）
『ハンセン病への偏見や差別をなくそう』（東京都）
以上3冊をもとに図書館が編集

「多磨全生園について」

多磨全生園入所者自治会による原稿をもとに図書館が編集

「ハンセン病・多磨全生園関係略年表」

『高松宮記念ハンセン病資料館10周年記念誌』
（高松宮記念ハンセン病資料館/編集 ふれあい福祉協会 2004年）
『俱会一処』（多磨全生園患者自治会/編 一光社 1979年）
『正しく学ぼう!!ハンセン病Q&A』（多磨全生園入所者自治会 2017年）
などをもとに図書館が編集

「いのちとこころの人権の森宣言」

東村山市が平成21年9月28日に行った宣言（原文のまま）

- ＊ 多磨全生園内の地図や史蹟については、『全生園の散歩道「人権の森と史蹟」めぐり』
（多磨全生園入所者自治会/編集・発行）をご覧ください。
（市内各図書館、多磨全生園入所者自治会（多磨全生園内）、国立ハンセン病資料館
などで配布しています。）

ハンセン病の知識

ハンセン病とは

ハンセン病とは、1873年（明治6年）にノルウェーのハンセンが発見した「らい菌」によって、主に皮膚や末梢神経が侵される感染症のひとつです。この菌の伝染力はごく弱く、感染しても発病することはきわめてまれであり、1943年（昭和18年）のプロミンに始まる化学療法剤の効果によって、確実に治るようになりました。現在日本では生活環境や栄養状態の改善によりハンセン病の発症は年間数名以下となっています。回復者（治癒した人）から感染する可能性は全くありません。

ハンセン病の歴史

ハンセン病は長い間「らい」あるいは「らい病」と呼ばれ、遺伝する病気、治らない病気と考えられ、顔や手足などの後遺症がときには目立つことから、強い感染力を持つ恐ろしい病気のように誤解されてきました。さらに国は、国内すべてのハンセン病患者を、療養所に強制隔離するという政策を取りました。そのため入所者は治癒しても療養所から一生出ることができず、家族への影響を怖れて本名を隠したり、子どもを生めない手術（断種）を条件に結婚が認められるなど厳しい生活を強いられました。有効な薬が開発された後も、隔離政策を進めた「らい予防法」を国は1996年（平成8年）まで廃止しなかったため、患者や回復者だけでなく、その家族に対しても就職や結婚を拒まれるなどの偏見や差別が続きました。

現在

国が隔離政策の継続により人権を侵害し、差別を助長したことについて謝罪した後、現在に至っても差別や偏見は残っており、今でも本名を名乗れない、家族の元へ帰れない、亡くなっても故郷のお墓に入れないという回復者が大勢います。現在、療養所は国立13か所、私立1か所の計14か所にあり、929名（2022年（令和4年）5月現在）の方が入所しています。入所者のほとんどは、すでに治癒していますが、高齢の上、後遺症による重い身体障害があったり、社会から長期間隔離されていたことから、社会に復帰できる回復者はごくわずかにとどまっています。

多磨全生園について

正式名称 国立療養所 た ま ぜんしやうえん 多磨全生園

住所 〒189-8550 東京都東村山市青葉町 4-1-1

電話 042-395-1101 (代表)

HPアドレス https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/iryuu/hansen/zenshoen

国立療養所になる前の名前	公立療養所 第一区府県立全生病院 ぜんせいびやういん
病院ができた日	1909 年(明治 42 年)9 月 28 日
かんかつ 管轄範囲	1 府 11 県 (東京府、神奈川県、千葉県、埼玉県、茨城県、群馬県、栃木県、愛知県、静岡県、山梨県、長野県、新潟県)
病院を作った目的	上記の 1 府 11 県にいるハンセン病患者を収容するため
国立療養所になった日付	1941 年(昭和 16 年)7 月 1 日
敷地面積	35 万 2,796 m ² (約 10 万坪)
入所者数 開院当初 最も多かったとき 現在	228 名 1,518 名 1943 年(昭和 18 年) 117 名 2022 年(令和 4 年)5 月

偏見や差別との闘い

長い間、ハンセン病は「らい病」と呼ばれ、治らないばかりか感染しやすい病気であるかのように恐れられていました。1907年（明治40年）、国は最初の「法律第十一号癩予防ニ関スル件」という法律を作り、決まった家に暮らさず、放浪しているハンセン病患者を強制的に隔離することにしました。法律の施行にともない、1909年（明治42年）に、第一区府県立全生病院がハンセン病患者を収容する目的で開院しました。これが後の国立療養所多磨全生園です。開院当初の患者数は、228名でした。

国は、1931年（昭和6年）に「癩予防法」を改正し、ハンセン病患者を強制的に収容することを徹底的に強めていきました。全国に13か所の療養所を作り、放浪している患者だけでなく、自宅にいる患者までも入所させるようになりました。

第一区府県立全生病院は、1941年（昭和16年）に国に移管され、国立療養所多磨全生園となりました。患者たちは生涯にわたって隔離され、自由を奪われるようになり、病気が治っても自宅に戻れず、園内で一生を過ごさなければならなかったのです。

患者たちは、1970年代（昭和40年代後半）まで、国の方針で強制的に園内のあらゆる労働をさせられました。比較的健康的な患者は、体が弱い患者や不自由な患者の付き添い看護をさせられていました。また、「前世の行いが悪いから『らい』にかかった」などといわれ、患者も家族も不当な差別を受けていました。偏見や差別は、その後も長い間続くこととなりました。

1996年（平成8年）、ようやく「らい予防法」は廃止されましたが、ハンセン病回復者（治癒した人）の人権について、すべての人が完全に理解を深めることができたわけではありません。

国立ハンセン病資料館と「らい予防法」廃止

1993年（平成5年）、入所者の寄付金を含めて、多磨全生園の隣に建てられた高松宮記念ハンセン病資料館は、その後、2007年（平成19年）4月1日に国立ハンセン病資料館としてリニューアルオープンしました。資料館には、ハンセン病に対する偏見と差別の歴史の資料が全国の療養所から集められ展示されています。

この資料館の存在も原動力となり、1996年（平成8年）4月に「らい予防法」廃止、2001年（平成13年）5月に「らい予防法」は憲法違反だったとする国家賠償請求訴訟で原告側が勝訴し、入所者の人権は徐々に回復されつつあります。これは、全国13か所に組織された国立療養所内の入所者自治会と、それらをまとめる全国ハンセン病療養所入所者協議会の長年にわたる闘いの成果です。ハンセン病に関わらず、あらゆる偏見差別の対象になる事例に対して、資料館は今後も欠かせない貴重な役割を担っていくでしょう。

2022年（令和4年）7月7日には、来館者が50万人に達しました。多くの人が悲劇の歴史に触れることで、ハンセン病に対する誤解が解け、理解が深まっていくのではないのでしょうか。

入所者の暮らし

多磨全生園で暮らしている人たちは、長い間、園の外に出ることもできず、不自由な生活をしていました。開園以来、入所者は自給自足を強いられ、牛や豚、鶏などを飼い、林を畑に変えて陸稲や麦や野菜を作り、誰もが「これでも患者の生活か」と見まがうような日常でした。さらに1972年（昭和47年）に患者付き添い制度がなくなるまで、重傷者の看護や施設運営のための沢山の作業を担ってきました。

そんな中で、どんな楽しみがあったのでしょうか。入所者の娯楽としてまずあげられるのは、昭和初期に行われていた全生座歌舞伎です。観衆も入所者だけでなく園内外を問わず、多い時は3千人を超えたという記録も残されています。次にあげられるのが野球です。第二次世界大戦後間もなく野球場を復活させ、最盛期にはリーグ戦が行われるほど、幾つものチームが誕生しました。この他にも多くの園内行事や文化活動が盛んに行われていました。

現在は、入所者の高齢化に伴い身体の不自由度も進みましたが、入所者と職員が一体となって、納涼祭、秋の全生園まつりを開催しています。これらのイベントには多くの市民が訪れて、交流の輪が広がっています。また、囲碁、カラオケ、舞踊、短歌、俳句、五行歌、ゲートボールなどを多種多様に楽しんでいます。1919年（大正8年）4月に刊行された機関紙『山桜』は現在の『多磨』に紙名を変えましたが2022年（令和4年）12月には通巻1211号を迎えました。

入所者の自治会と啓発活動

入所者は自治会を組織し、長い時間をかけて医療、福祉、介護を含め、生活の改善を国に求めてきました。さらに入所者たちが経験してきたこの悲劇を二度と繰り返さないように、小・中・高校生を中心とした多くの市民に向けて、入所者数名による啓発活動も行われています。

「らい予防法」も廃止され、国の隔離政策もなくなり、ハンセン病療養所の役割もいずれは終わりを迎えます。しかし、将来に向けての課題や展望が残されています。将来構想や「人権の森構想」などを含む課題を解決するために自治会活動は現在も続けられています。

「人権の森構想」と多磨全生園のこれから

かつて偏見や差別のまだ強かった1950年代後半（昭和30年代）に、入所者は「いつの日か職員と患者が、あるいは市民と患者が、この桜の花の下で、偏見や差別を乗り越えてお互いが一市民として、お花見をしながら一緒に食事を楽しんだり、時には酒を酌み交わす時代が来てほしいものだ」という深い思いを込めて資料館通りに桜を植えました。この願いはようやくかない、現在お花見の時期には、多数の市民が訪れるようになり、職員も共にお花見を楽しむ時代となりました。その桜をはじめ、園内には252種、3万本の樹木が入所者の手によって育てられ、東京ドームが8個入る広大な敷地には、四季折々の花が咲きます。

「人権の森構想」は、入所者が人権を取り戻す闘いをしてきた証として多磨全生園内の古い建物を保存すること、また、この広大な森を後世に残し、人権について学び考えるための「人権の森」にすることを目的としています。

2003年（平成15年）には第1期事業として男性独身寮だった「山吹舎」の復元と「望郷の丘」の整備が多くの方の募金により行われました。

人権の森構想は、東村山市や療養所内外の多くの賛同者を得て、少しずつ実現に向けて歩み始めています。

2009年（平成21年）9月には、100周年を迎えた多磨全生園の豊かな緑と人権の歴史を長く後世に伝えるため、東村山市が「いのちとこころの人権の森宣言」を行いました。

北條 民雄（ほうじょう たみお）

小説家

本名：七條 晃司（しちじょう てるじ） 出身地：徳島県阿南市（ソウル生まれ）

1914年（大正3年）9月22日 生まれ

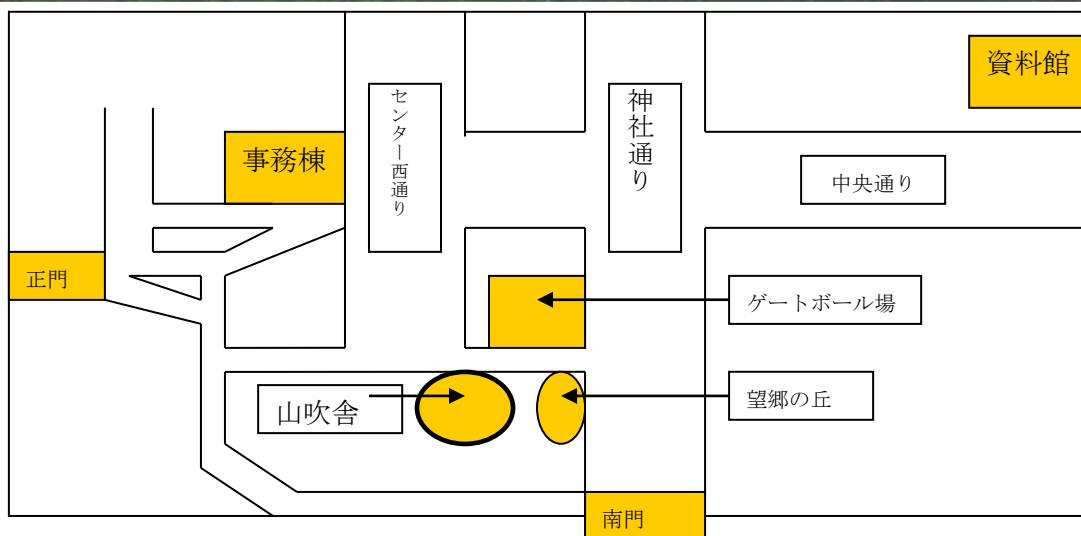
1937年（昭和12年）12月5日 23歳で死去

1934年（昭和9年）5月に多磨全生園に入所した北條民雄は、短い生涯の中で小説『いのちの初夜』を書き上げました。この作品と才能が日本を代表する作家のひとりである川端康成の目にとり、1936年（昭和11年）に文芸雑誌『文学界』2月号で紹介されると、全国にある他のハンセン病療養所でも入所者の文芸活動は活発になりました。このため、日本のハンセン病文学は世界に類を見ない、優れた作品と作家を生み出しています。

山吹舎について

「山吹舎」は、1928年（昭和3年）に入所者自身の作業によって建てられた木造平屋建てで、1977年（昭和52年）まで男子独身寮として使われていました。12畳半の部屋が4つあり、多いときには1部屋に8名が入居し30人以上が生活していたことがありました。建築当初は、廊下にはガラス戸がなく雨戸だけだったため、冬には室内で薪を燃やしお湯を沸かして暖をとっていました。

使われなくなってから雨漏りがするなど傷みが激しくなっていますが、2003年（平成15年）11月に「人権の森」構想事業のひとつとして入所者の方々の努力と多くの人の募金により復元されました。この構想はハンセン病の苦難の歴史を後世に伝えるため、入所者の人々が思いを込めて植えてきた緑とともに、歴史的建造物等を残すものです。修復された山吹舎は南門の近く、望郷の丘のとなりにあります。



ハンセン病・多磨全生園関係略年表

1873年(明治6年)	ノルウェーの医学者アルマウエル＝ハンセン、らい菌を発見
1900年(明治33年)	内務省、第1回らい患者数調査実施(日本で最初の本格的調査)
1907年(明治40年)	明治四十年法律第十一号(癩予防ニ関スル件)公布
1909年(明治42年)	全国を5区に分け、それぞれに連合府県立療養所を設立 東村山村に第一区府県立全生病院開院(9月)
1931年(昭和6年)	癩予防法(法律第58号)が公布され、全患者の強制隔離を法文化
1936年(昭和11年)	北條民雄の『いのちの初夜』が川端康成の推薦で雑誌『文学界』2月号に掲載される
1941年(昭和16年)	府県立の5療養所を国立に移管し、全生病院は、国立癩療養所多磨全生園と改称
1943年(昭和18年)	化学療法薬プロミンの有効性報告される(1941年開発・治験)
1946年(昭和21年)	日本国憲法公布、患者にも選挙権が与えられる
1948年(昭和23年)	多磨全生園入所者によってプロミン獲得促進委員会結成。以後獲得闘争の推進主体となる(翌年プロミン予算化)
1951年(昭和26年)	全国各園の入所者の統一的組織である「全癩患協」結成。(後の全患協、現在の全療協)
1953年(昭和28年)	らい予防法(法律214号)公布 全生学園小学部が化成小学校分教室となる。生徒6名(1976年閉校) 全生学園中学部が東村山第二中学校分教室となる。生徒9名(1979年閉校)
1955年(昭和30年)	国立らい研究所設立(1962年に国立多磨研究所、1997年より国立感染症研究所ハンセン病研究センター)
1969年(昭和44年)	ハンセン氏病文庫(当時「癩文庫」)全生図書館内に設置
1977年(昭和52年)	ハンセン病図書館建設
1988年(昭和63年)	東村山市立秋津図書館開館「ハンセン病を知る本」コーナー設置
1993年(平成5年)	高松宮記念ハンセン病資料館開館
1996年(平成8年)	らい予防法の廃止に関する法律公布(らい予防法廃止)
1998年(平成10年)	らい予防法下の終生絶対隔離政策とそれに伴う人権侵害を違憲とし、菊池恵楓園・星塚敬愛園の入所者13人が、「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」を熊本地裁に提訴。この後、原告が増え続け、東京地裁・岡山地裁への提訴も含めて、最終的にその数は2,300人を超えた
2001年(平成13年)	熊本地裁は原告勝訴の判決。国は控訴断念を発表し、判決確定 東村山市立中央図書館に「ハンセン病を知る本」コーナー設置
2002年(平成14年)	第1回ハンセン病問題に関する検証会議の開催
2003年(平成15年)	山吹舎(男子独身舎)修復完成

2004年(平成16年)	望郷の丘修復完成 「全生園とハンセン病を知る ブックリストと資料」(東村山市立図書館)発行
2005年(平成17年)	平沢保治氏の寄付により、各東村山市立小中学校図書館に「いのちとこころの本」設置 『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書』提出 ハンセン病資料館、増改築のため一時休館
2007年(平成19年)	国立ハンセン病資料館としてリニューアル開館
2008年(平成20年)	ハンセン病図書館閉館 「全生学園跡」記念碑建立 ハンセン病問題の解決の促進に関する法律公布
2009年(平成21年)	多磨全生園開園100周年 東村山市が「いのちとこころの人権の森宣言」を行う 第1回「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」式典開催
2010年(平成22年)	「いのちとこころの人権の森宣言」碑建立
2011年(平成23年)	「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼」碑建立
2012年(平成24年)	花さき保育園が多磨全生園内に開園
2013年(平成25年)	「じんけんのもり」ポスター、リーフレット、シンボルマーク作成 待労院診療所(熊本市)閉鎖
2014年(平成26年)	DVD「ひいらぎとくぬぎ」(東村山市・多磨全生園入所者自治会)発行 重監房資料館開館(栗生楽泉園内)
2015年(平成27年)	映画「あん」(原作:ドリアン助川 監督:河瀬直美)公開
2016年(平成28年)	ハンセン病「特別法廷」について最高裁判所は謝罪するも、違憲は認めず 国の隔離政策により深刻な差別を受けたとして、元患者家族が集団提訴(熊本地裁)
2019年(令和元年)	多磨全生園開園110周年 ハンセン病元患者家族に対する補償金の支給等に関する法律公布

主要参考文献:『高松宮記念ハンセン病資料館10周年記念誌』

(高松宮記念ハンセン病資料館/編集 ふれあい福祉協会 2004年)

『俱会一処』 (多磨全生園患者自治会/編 一光社 1979年)

『正しく学ぼう!!ハンセン病Q&A』

(多磨全生園入所者自治会 2017年)など

いのちとこころの人権の森宣言

かつてハンセン病は、不治の伝染病とされ、患者は国の強制隔離政策と人々の偏見や差別の中で、長く苦しい歴史を歩んできた。

ここ多磨全生園には、故郷を捨てさせられた人々が眠る納骨堂、終生隔離のなかで故郷を偲んだ望郷の丘、苦難の歴史を語り継ぐハンセン病資料館、これらとともに多くの想いがある。

この地を第二の故郷とした人々は、萎えた手足に力を込め、病をおして拓いた土地に、一人一人が想いを込め、一本一本植樹し緑を育てた。

いま、その緑の地は、そこに暮らす人々と東村山市民との百年の交流をとおり、いのちとこころの人権の学びの場となった。

私たち東村山市民は、こころをひとつにし、ここに眠る人々を鎮魂し、この土地と緑と歴史のすべてを『人権の森』として守り、国民共有の財産として未来に受け継ぐことを宣言する。

平成21年9月28日

東京都 東村山市

多磨全生園とハンセン病を知る ブックリストと資料

(改訂第六版より「全生園とハンセン病を知る」からタイトルを変更)

東村山市「いのちの教育」推進プラン関連事業

平成16年(2004)12月 発行
平成17年(2005)12月 改訂
平成19年(2007)11月 増補改訂版
平成20年(2008)11月 増補改訂版一部修正
平成21年(2009)11月 改訂第二版
平成24年(2012)11月 改訂第三版
平成26年(2014)11月 改訂第四版
平成31年(2019)3月 改訂第五版
令和2年(2020)1月 改訂第六版
令和5年(2023)2月 改訂第七版

監修 多磨全生園入所者自治会

国立ハンセン病資料館

編集・発行 東村山市立図書館

〒189-8501 東京都東村山市本町1-1-10

TEL 042-394-2900 FAX 042-394-4107

ホームページ <https://www.lib.city.higashimurayama.tokyo.jp>